P－26　口腔保健学科学生の社会人基礎力の推移

○園木　一男[1]、井上　博雅[1]、日高　勝美[1]、高橋由希子[2]、千綿かおる[2]
[1]九歯大・口保健管理、[2]九歯大・口機能支援

社会人基礎力は、経済産業省が定義する「職場や地域社会の中で多様な人々と仕事を行っていく上で必要な能力」とされ、その診断は、就職活動時の自己分析や、大学生活をこれからどのように過ごせば就業力が増すのか気付く資料となる。平成24年度(以下「前年度」という)は、3年生と1年生の社会人基礎力を把握し、他大学との比較を行った。平成25年度(以下「本年度」という)は4年生と2年生に実施し、1年間の学生生活による社会人基礎力の向上を検証した。4年生の総合スコア(3つの能力、「前に踏み出す力」・「考え抜く力」・「チームで働く力」の合計)の平均点は73.8点(以下100点満点)で前年度の68.8点より有意に上昇し、本年度も他校の平均点63.6より高かった。3つの能力はすべて上昇したが、特に「前に踏み出す力」が有意に上昇し、その能力要素である「働きかけ力」の上昇が大きかった。4年生は前年度も「チームで働く力」と「考え抜く力」が他校に比べて高かったが、1年間でこの2つの良い点を保ちつつ、前年度は他校の平均点より低かった「働きかけ力」を伸ばして「前に踏み出す力」をとても高いレベルまで向上させた。2年生の総合スコアの平均点は前年度の60.0点から65.0点に有意に上昇し、他校平均点60.7点を上回った。3つの能力はすべて上昇したが、特に「前に踏み出す力」の能力要素「実行力」が有意に上昇し、「前に踏み出す力」は他校平均点と同等になった。「考え抜く力」はその能力要素「計画力」が有意に上昇し、前年度と同様に他校平均点を上回った。2年生は、1年次の総合スコアは他校と同じレベルであったが、高い「考え抜く力」を維持しつつ、劣っていた「前に踏み出す力」を向上させることにより他校よりやや高い総合スコアとなった。2学年とも1年間で社会人基礎力の向上がみられた。

P－27　高齢(65歳以上)のメインテナンス・SPT患者の現在歯数と主観的健康観および、STAI(状態・特性不安検査)との関連性

○三阪　美恵[1]、久保田浩三[1]、千綿かおる[1]、高橋由希子[1]、秋房　住郎[2]
[1]九歯大・口機能支援、[2]九歯大・口保管理

現在、高齢化がますます進む中、メインテナンス・SPTを継続することで、歯の喪失を抑制し、歯周組織を健全に維持することが可能と思われる。本研究では高齢のメインテナンス・SPT患者の現在歯数と主観的健康観およびSTAIとの関連について検討した。

対象者は、歯周疾患と診断され治療後メインテナンス・SPTに移行し、九州歯科大学附属病院口腔保健科に通院を続けている65歳以上で、同意した者に対し、メインテナンス受診日に、正村ら(1996)の自記式質問票を改変したものとSTAIを用いて実施した。また、口腔内の状況は、カルテから属性、受診年数、現在歯数、補綴装着の有無を調査した。

対象者は、70名(女性49名・平均年齢71.8±5.7歳、男性21名・平均年齢72.4±4.4歳)、平均メインテナンス年数13.0±9.4年(女性13.0±10.0年、男性10.5±8.3年)、平均現在歯数21.4±5.6歯(女性21.0±5.6歯、男性22.6±6.2歯)であった。主観的健康観で健康群は63名(90.0%)、不健康群は7名(10.0%)で健康群が有意に高値を示した($p<0.01$)。咀嚼満足者は67名(95.7%)でその内20歯以上を有するものは48名(71.6%)、19歯以下は19名(28.4%)であった。20歯以上群では98%、19歯以下では90.5%が咀嚼満足を示した。また、STAI調査において、主観的健康観で不健康群7名中STAI調査に応じた6名全員が高不安であり、咀嚼満足で不自由とした3名とも高不安であった。このことは、主観的健康観は精神的要素が含まれることが影響しているものと思われる。

高齢のメインテナンス・SPT患者は、現在歯数が多いことから、口腔の主観的満足、咀嚼満足度を得ることができることが示唆された。